

福山平成大学経営学部紀要  
第16号(2020), 1-20頁

## 『広陵詩事』における詩会の記録

市瀬 信子

福山平成大学経営学部経営学科

**要旨**：『広陵詩事』は、清代の学者である阮元が著した、清代初期から中期における揚州の詩の記録である。阮元は『広陵詩事』が刊行された前年、清代初期から中期における揚州詩人を収録した『淮海英靈集』を完成させている。『広陵詩事』は、同時期の揚州を対象に、『淮海英靈集』に収録しきれなかった詩にまつわる様々な事柄を記録したものである。その中でも特に興味深いのは、詩会に関する記述である。揚州は清代前半期、詩会の地としてその名を知られていた。揚州詩会の特徴は、交通の要衝であったこと、揚州の塩商人が外部から芸術家を招いたことから、外の地域から訪れた多くの詩人によって詩会が盛んになったことにある。『淮海英靈集』は、揚州出身者と揚州居住者を個人としてとらえた詩集であり、雑多な人と集団の詩作に支えられた揚州詩壇の文化を反映することができなかった。その意味で『広陵詩事』は、清代揚州詩壇の実態を伝える貴重な記録と言える。

本稿では、『広陵詩事』の特徴を明らかにするとともに、清代に盛んになった地方誌等の記録の中で、詩会がどのように記録されたのかを検証し、詩会と地方の記録との関連について考察する。

**キーワード**：広陵詩事、淮海英靈集、詩会

### 1. はじめに

『広陵詩事』<sup>1)</sup>は、清朝を代表する学者、阮元(1764-1849)が撰した、清代初期から中期にかけての揚州に関する詩話である。様々な詩話の中でも、『広陵詩事』のように特定の地域を対象とした詩話は、明代以降増加し、清代に到って増加数は劇的なものとなった。ゆえに、地域別の詩話は清代文学の一つの特徴を示すものといえよう。『広陵詩事』はこうした地域詩話を代表する作品である。更に阮元という学者の撰ということもあり、最も信頼できる地域資料として各種文献に引用されるものでもある。

地域の中でも広陵つまり揚州という地域は交通の要衝であり、多くの文人がその地を訪れたことで知られる。更に揚州では塩商が活躍し、彼らは豊富な財力を元に、文化事業を支え、文人士を庇護した。またパトロンとしてだけでなく、自らも学問や文学を愛好し、貴重書を収集しては編纂考訂事業に取り組んだ。詩においては、自らの園林や屋敷で各地からの名士、流寓の詩人達を招いては盛んに詩会を開催し、唱酬をおこなった。故に清代

の揚州は詩会の地として広く知られ、揚州詩壇は、個人として際だった詩人を輩出したというのではなく、他郷から訪れた多くの名士と交流し、唱酬するなかで詩会の文化を育てた点にこそ特徴があると言える。

この、各地からの客人が盛り上げた文化であること、それらの人々を招き入れた詩会によって盛んになった詩壇であることが、清代揚州詩人を記録する際に幾つかの問題を生んだ。一つは、地域という視点でみた時、他郷から流入した多くの詩人を地域の詩人としてどう扱うべきか、という問題である。一つは、揚州を特徴づける詩会という集団制作の文化は、個人別に詩人を収録する地域の総詩集の中でどう記録すべきか、という問題である。それらの問題に直面し、阮元の出した答えが、個人と集団、揚州と他郷を、二つの書物に分けて記録するという方法である。阮元は、揚州詩の総集である『淮海英靈集』を編纂し、その直後に揚州の詩話である『広陵詩事』を撰した。『淮海英靈集』には他郷の詩人を収録せず、詩会に関する記録もほとんどない。『広陵詩事』は、その両方を記録する。二つの作品は、互いに補い合うことで始めて一つの揚州詩壇の記録となるのである。

そこで本稿では、まず清代の地方詩話の中での『広陵詩事』の位置づけを明らかにした上で、『広陵詩事』の特徴を、『淮海英靈集』との比較から検証する。それによって『広陵詩事』における詩会の記録の意義について考察する。また揚州には、これより先に地域の名所を中心に編纂された『揚州画舫録』があり、ここにも詩会の記録がある。阮元には「画舫録序」があり、この書物の内容を意識した上で、『広陵詩事』を書いたと思われる。よって、比較検証には、『揚州画舫録』も用い、そこから『広陵詩事』が描こうとしたものを明らかにしたい。

## 2. 清代の地方詩話

清代は、文学史上、地域性が最も際だった時代である。地域文学を代表するものの主要部分は詩歌であった。故に膨大な数の地域別の詩集、地域別の詩話が編纂されることとなった。<sup>2)</sup> その背景にあるのは地方志の編纂である。明清時代は国家事業である『一統志』編纂にともない、その根底となる地方志の編纂が急務となった。地方志には「文苑伝」、「芸文志」といった項目がある。地域別の詩集や詩話に載せられた作品、そこにつけられた小伝、小伝に記載される詩集などは、地方志を充実させるために、必要不可欠な資料となった。それが一層地域の詩集、詩話を盛んにさせることとなった。その例として、阮元編纂『淮海英靈集』凡例に次のようにある。

一、小伝中所載著述経史子集名目、皆従各家志伝采入、多未親見原書想今亡者俱多、或本虚標名目。然与其刪之、毋寧存之、庶将来録芸文志者、得拋此采訪云。

一、小伝中に載する所の著述経史子集の名目は、皆各家の志伝より采入し、多く未だ親ら原書を見ずに今亡き者を想ふもの俱に多し、或ひは本おり虚しく標名目を標すらん。然れども其の之を刪るよりは、毋寧ろ之を存し、庶はくは将来芸文志を録せんとする者、得此に拠りて采訪するを得んと云ふ。

ここでは、実物を見ていなくても、各人の志伝に掲載されていればその著作を記録するという方針を示し、それは芸文志に記録する者の資料となることを考慮してのことであるとはっきり述べている。地方誌、史書の編纂が盛んに行われていた時代に、その資料となるべき詩集とする、というのが『淮海英霊集』編纂の意図であった。

地域別の詩話は郡邑詩話等とも称される。蒋寅は、明清の地域文学を対象とする選本の中で主要部分は詩歌であり、その中で数量が際だって多い郡邑詩選及び詩話の誕生は、地域を視点とする意識が強くなってきたことを示すもので、清代文学研究者がまず注意すべき重要な問題であると指摘する。<sup>3)</sup> 詩選、詩話といっても、それらは実は別々のものではない。夏勇は、総集と詩話は形式上似通ったところがあるとし、『中国叢書総録・子目分類索引』が集部・総集類に『広陵詩事』を入れていることを指摘する。<sup>4)</sup> 蒋寅『清詩話考』（中華書局 2005）の「清詩話見存書目」には、郡邑詩話として40種以上を収録しており、その中に『広陵詩事』もある。更に当時地方誌が盛んに編纂されたことと地方詩話が深く関わることを指摘している。<sup>5)</sup> 揚州を含む清代の地域詩話には『広陵詩話』以外にも、複数の地方詩話が存在する。<sup>6)</sup> これらの中で、『広陵詩事』が他と異なっているのは、他の詩話が単独で作られたのに対し、『淮海英霊集』という総詩集がまず編纂され、その欠を補うものとして編纂されたという点である。よって『広陵詩事』を知るには、撰者阮元と『淮海英霊集』をまず見なければならぬ。

### 3. 阮元と『広陵詩事』

『広陵詩事』の撰者である阮元は、字を伯元といい、芸台と号した。江蘇儀徴の人で、乾隆五十四年（1789）の進士である。嘉慶元年（1795）に山東学政から、浙江学政に転じると、出身地の儀徴を含む揚州一帯の清初からの詩人とその詩を集め、『淮海英霊集』の編纂に取りかかった。『淮海英霊集』序に「乾隆六十年、自山左学政、奉命移任浙江、桑梓非遙、徴訪較易、遂乃博求遺籍、徧于十二邑（乾隆六十年、山左学政より、命を奉じて任を浙江に移し、桑梓遙かに非ず、徴訪較や易く、遂に乃ち博く遺籍を求め、十二邑に遍し）。」とある。嘉慶元年に赴任し、この年、『淮海英霊集』だけでなく、浙江を対象とした地方詩の総集である『両浙輜軒録』の編修にも取りかかる。

『淮海英霊集』は、嘉慶三年（1798）正月に完成し、『両浙輜軒録』も同年4月には編纂が終わった。翌嘉慶四年（1799）、『淮海英霊集』に収めきれなかった詩事を集めた『広陵詩事』の制作にとりかかる。『広陵詩事』は嘉慶六年（1801）に刻された。阮元は更に嘉慶十三年（1808）に従弟の阮亨と王予に命じて『続淮海英霊集』を編纂させており、故郷揚州の詩の記録を残そうという強い意志を持っていたことがうかがえる。<sup>7)</sup>

なお、揚州の記録としては、これに先立つ乾隆六十年（1795）に、李斗（1749-1817）によって『揚州画舫録』十八巻が著されている。これは揚州を12の区域にわけて、各地域での名勝、風俗、人物などを記す。李斗は揚州の人で、『揚州画舫録』の中には、揚州の詩会の記録も多く、『広陵詩事』と重なるところも多い。阮元は嘉慶二年（1797）に『揚州画舫

録』に序を寄せており、これは『淮海英霊集』『広陵詩事』の作成の途中にあたる。よって阮元が『広陵詩事』編纂した時、『揚州画舫録』の内容をよく理解していたことは確かである。それだけに同類の他の作品といかなる点が異なるのかを比較検討することは、『広陵詩事』の特性をより明確にすることになるであろう。よって、同一地域を対象とした詩集としての『淮海英霊集』、詩話に類するものとして『揚州画舫録』との比較も加えつつ検討を進める。まずは同じ阮元の『淮海英霊集』とその編修方針について比較してみよう。

#### 4. 『広陵詩事』と『淮海英霊集』

『淮海英霊集』の「淮海」とは、『清史稿』卷五十八の「揚州府、領州二（高郵・泰）、県六（江都・甘泉・揚子（すなわち儀徴）・興加・宝応・東台）」の九邑と、「旧と揚州に隸いし」（凡例）「通州直隸州、領県二（如臯・泰興）」の三邑を含む十二邑であり、旧時の揚州を指す。また、採録するのは、凡例に「今録詩托始国初（今詩を録するに托するは国初に始む）」「所録詩人、皆以已故者為断（録する所の詩人、皆故者を以て断と為す）」とあるとおり、清初から、乾隆年間の詩人で故人である者を対象とする。収録された詩人は865名、詩は1488篇に及ぶ。この詩集を編纂した理由について、阮元は序の中で次のように述べる。

余之録此集、非敢取郷先生之詩衡以格律而選定之也、亦非藉已故詩人為延誉計也。広陵耆旧零落百余年矣、康熙、雍正及乾隆初年已刊專集漸就散失、近年詩人刻集者鮮、其高情孤調卓然成家者固多。即殘篇断句僅留于敝篋中者亦指不勝数、亟求之猶懼其遺佚而不彰、遲之又久不更替乎。且事之散者難聚、聚者易伝。後之君子、懷耆旧之逸轍、采淮海之淳風、文献略備、庶有取焉。（『淮海英霊集序』『擘經室二集』巻八）

余の此の集を録すは、敢へて郷先生の詩を取りて衡<sup>はか</sup>るに格律を以て之を選定するに非ざるなり、亦た己故の詩人を藉りて延誉の計を為すに非ざるなり。広陵の耆旧零落すること百余年にして、康熙、雍正及び乾隆初年已に專集を刊行するも漸く就<sup>すなわ</sup>ち散失し、近年詩人の集を刻する者鮮きも、其の高情孤調卓然として家を成す者固より多し。即ち殘篇断句僅かに敝篋中に留むる者も亦た指もて数ふるに勝へず、亟やかに之を求むるも猶ほ其の遺佚して彰かならざるを懼れ、之を遅くせば又久しく更替せざるか。且つ事の散ずる者は聚め難く、聚まる者は伝へ易し。後の君子、耆旧の逸轍を懐ひ、淮海の淳風を采るに、文献略ぼ備はれば、庶<sup>こいねが</sup>はくはこれに取る有らん。

この詩集は、ある格律などの基準をもとに選別したり、物故詩人を借りてその名誉を頌揚するものでもないという。これはこうした詩集が多く編纂されていた背景があつてのことである。当時の現状として阮元が懸念するのは、揚州の詩人らが世を去り詩壇が衰えてから、100年余りが過ぎ去っているということ、また清朝は印刷技術が進展していたものの、康熙（1662-1722）・雍正（1723-1735）・乾隆（1736-1795）年間に刊行された詩の專集は徐々に散逸し始め、近年は詩集の刊行も少なくなつてしまつたことである。また、詩集になら

ない詩句の断片も多く残るが、これもまた失われて消えてゆくのではないかと懸念を述べる。よって、揚州一帯の詩の文化を残すに足るものとなるよう、編纂を始めたというのである。最後に「庶有取焉」とあるのを見れば、淮海英霊集を資料として、他の地方文献に採録し、生かしてほしいという希望も見える。『淮海英霊集』は、ただ詩を集めただけでなく、これが地域の資料として生かされることを願って編纂されたのである。

『淮海英霊集』には凡例があり、編修方針を記す。その中から、『広陵詩話』に関わる項目を幾つか挙げる。

一、外省人入籍揚州、其生卒在揚州者、方入録、若流寓詩人、本極繁多、且昔王漁洋司寇、盧雅雨軫運、馬秋玉徵君等、招集名流觴詠尤盛、多不勝收、当俟另纂。

一、外省人の揚州に入籍するは、其の生卒の揚州に在る者にして、<sup>はじめ</sup>て録に入る。流寓の詩人のごときは、本より極めて繁多なり。且つ昔王漁洋司寇、盧雅雨軫運、馬秋玉徵君等、名流を招集し觴詠尤も盛んにして、多くして収むるに勝へず、当に另纂を俟つべし。

この凡例では、本籍が揚州でない場合、揚州で生まれ育った者以外は記録しない、という方針を示す。しかし、流寓の詩人が極めて多いこともまた認めている。また、王士禛（漁洋）、盧見曾（雅雨）、馬曰琯（秋玉）らが名士を招いて主催した文宴つまり詩会が盛んであったことも記す。馬曰琯は、徽州の籍であるが、揚州で生まれ育ち、塩商として様々な文化活動に取り組んだ。阮元はこの人物は揚州人として扱い、『淮海英霊集』に収録する。一方、王士禛、盧雅雨は山東から揚州に赴任した官僚であり、『淮海英霊集』には収録されない。詩会については、主催者の出身地と関わりなく、数が多いため、詩集とは別に編纂するとしている。

揚州詩壇を隆盛に導いたきっかけは、赴任した官僚であり、揚州に寄寓した詩人達と言われるが、『淮海英霊集』は、揚州人でないという理由で彼らを採録しない。しかし、これは当時の地方詩集としては特異な方針であった。当時の地方誌及び地方詩集には、他郷からの流寓の詩人、訪れた著名人の活躍を載せることで当地の文化の隆盛を際立たせようという例が多かったからである。蒋寅は、地方の詩文集及び地方詩話について、「注意に値するのは、いかなる詩集、詩話であっても、常に当地に流寓し、あるいは当地の風物を詠じた外地の詩人を収録する。」「外地の作者による当地の風物を詠じた作品は、往往にして当地への影響が大きい。とりわけ作者が著名人だった時は、彼らの歌が当地の人に矜恃をもたらす資本となり、広く伝承されて多くの人に知られる。」とし、例として王士禛の詩句を引き合いに出し、地域詩集が外地の人の作品を収録する理由がそこにあるとする。<sup>8)</sup>そしてこれらが地方誌とくに「芸文志」に掲載すべき資料を補うものであることを指摘する。先にみた『淮海英霊集』凡例でも同じく「芸文志」の資料を提供すべく編纂していたにも関わらず、外地の人を全く収録しないというところに、『淮海英霊集』は地域の詩集の主人公は地域の人物とすべきだという阮元の考えが見て取れる。しかし、揚州の文化が揚州人

だけでできあがったものではないという客観的事実も十分認識していたのは確かである。塩商や外地からの官僚の詩会が名流を招いての詩宴が多く詩集に収録できないというが、主催者の多くが外部の人であったことも関わっているだろう。それらを含め多くの詩会は「另纂」すると述べているが、結果的にはこれらは『広陵詩事』に記載された。

一、忠孝節義之事蹟、及讌会之韻事、園亭之廢興、彝言名句之流伝、書画古器之賞鑑、元已別為広陵詩話若干卷、俟定稿後再為付梓。

一、忠孝節義の事蹟、及び讌会の韻事、園亭の廢興、彝言名句の流伝、書画古器の賞鑑、元已に別に広陵詩話若干卷を為り、稿を定むるを俟ちて後再び為に梓に付す。

この凡例では、『広陵詩事』の方に入れる内容を具体的に挙げている。その中に「讌会の韻事」つまり詩会がある。「園亭の廢興」は、詩会の場となった大規模な園林や邸宅の盛衰を言う。こうした詩会の記事は、『広陵詩事』に入れて出版するという。この他にも伝えられた名言名句、書画骨董の賞鑑とあるが、当時の詩会は書画骨董を題材とした詩もまた当時の詩会の詩題の定番であり、これらもまた詩会に関わる。このように『広陵詩話』は詩会の詩やそれに関わる記述を多く含むことになった。『淮海英靈集』は詩会を記録しないとすもの、詩会の詩題が多く見られる。これらの詩が生まれた背景にある揚州の詩会を記すのが『広陵詩事』だとすれば、いずれが欠けても揚州詩壇の記録としては不備なものとなる。『淮海英靈集』を補い、詩集と合わせることで揚州詩壇を複層的に伝えることとなったのが『広陵詩話』である。その編集方針を「広陵詩事序」から確認してみる。

余輯『淮海英靈集』既成、得以読広陵耆旧之詩、且得知広陵耆旧之事、隨筆疏記、動成卷帙、博覽別集、所獲日多、遂名之曰『広陵詩事』。其間有因詩以見事者、有因事以記詩者、有事不涉詩而連類及之者。大指以吾郡百余年来名郷賢士、嘉言懿行、綜而著之。庶幾文献可徵、不致零落殆尽。且余生于諸耆旧百余年後、亦藉此收羅殘缺、以尽後学之責也。退食余閑、檢付弟亨、子常生鈔録成書、將以付刻。至于爵里族姓或有舛誤、遺聞佚事、再当補述。尚望同志君子訂而統之。

余『淮海英靈集』を輯して既に成り、以て広陵耆旧の詩を読むを得、且つ広陵耆旧の事を知るを得、筆に随ひ疏に記し、動もすれば卷帙を成し、別集を博覽し、獲る所日に多く、遂に之に名づけて『広陵詩事』と曰ふ。其の間に詩に因りて以て事を見る者有り、事に因りて以て詩を記す者有り、事の詩に涉らずして連類して之に及ぶ者有り。大指は吾が郡百余年来の名郷賢士、嘉言懿行を以て、綜べて之を著はさんとす。文献徴すべく、零落殆尽を致さざらんことを庶幾ふ。且つ余 諸耆旧百余年の後に生まれ、亦た此を藉りて殘缺を収羅し、以て後学の責を尽くすなり。退食の余閑、檢するに弟亨、子常生に付して鈔録成書せしめ、將に以て刻に付さんとす。爵里族姓に或ひは舛誤有り、遺聞佚事有るに至っては、再び当に補述すべし。尚ほ同志君子に訂して之を続けんことを望む。

『広陵詩事』は、『淮海英靈集』編纂の時に、広陵のかつての名士達の詩を読み、彼らのことを知り、書き留めたものが多くなり、ついには『広陵詩事』として別に書物としたという。詩によって事跡を見ることのできるもの、事跡から詩のありようがわかるもの、詩に関わらない事跡であっても迎れば詩に関わることがらなどを全て記すという。『淮海英靈集』凡例にあった、何かを除外する規定を設けるのとは逆に、より広い内容を収録しようという姿勢が見える。また、清朝始まって以来約100年間の揚州詩人たちを記す文献が散逸することを恐れ、文献を収集して記録したという。また記した爵里族姓などの事実に誤りがあれば補い、またこの後も訂正を加えてほしいと願っている。つまり、『広陵詩事』に、揚州地方誌の資料たるべき意義を持たせているのである。

では『広陵詩事』に収録され、地域の記録として残すべきと阮元が考えた詩会の記録がどのようなものか、具体的に見てみよう。

## 5. 紅橋修禊の記録

清代に揚州で官僚が主催した詩会の代表例が、紅橋で開催された紅橋修禊である。紅橋は虹橋とも表記され、清初に王士禛がこの地で脩禊の詩宴を開いて以来、揚州詩宴を代表する場となった。修禊とは、三月三日に川辺で不祥を払う行事であり、永和九年（353）、王羲之が蘭亭で脩禊の詩宴を開いて以後、脩禊は文人雅集の一つとして広く行われるようになった。その代表例が、王士禛、孔尚任、盧見曾による紅橋脩禊である。<sup>9)</sup>王士禛（1634-1711）は、順治十七年（1660）～康熙四年（1665）まで揚州に揚州府推官として赴任し、康熙元年（1662）春に、揚州の名士達と脩禊を開き、「浣溪紗」を作った。続いて康熙三年春、紅橋で再び揚州を訪れた名士達と脩禊を行い、この時王士禛が詠じた「冶春絶句」二十首は広く人口に膾炙した。孔尚任（1648-1718）は、康熙二十五年（1686）～康熙二十九年（1690）始めまで工部侍郎の補佐として揚州に赴任した。揚州で何回か脩禊を行っているが、康熙二十七年（1688）に名士24名とともに行った紅橋脩禊が知られる。また盧見曾（1690-1768）は、両淮塩運使として、乾隆元年（1736）～乾隆四年（1739）、乾隆十九年（1754）～乾隆三十年（1765）に赴任し、同郷の王士禛にならって数回の脩禊を紅橋で行った。中でも乾隆二十二年（1757）に行われた紅橋脩禊は、最も規模が大きく、多くの和韻詩を集め、揚州詩壇の盛事と称された。彼らは三人とも、山東の人である。王士禛、盧見曾は、『淮海英靈集』凡例に、「漁洋司寇、盧雅雨転運、馬秋玉徵君等、招集名流觴詠尤盛」とあったように、揚州の唱酬を盛んにした人物としてはずすことのできないものである。『淮海英靈集』に記載されなかった紅橋脩禊は、『広陵詩事』でどのように記録されたのか、確認してみよう。

紅橋為詩人聚集之地、王阮亭、宋荔裳皆嘗詠于此、後孔東塘在広陵時、上巳招同吳蘭次〔綺〕、鄧孝威〔漢儀〕、費此度〔密〕、李艾山〔沂〕、黃仙裳〔雲〕、宗定九〔元修〕、宗子發〔元予〕、查二瞻〔士標〕、蔣前民〔易〕、閔賓連、王武徵〔方岐〕、喬東湖〔寅〕、

朱其恭、朱西柯、張諧石〔韻〕、楊爾公、吳彤本、卓近青〔爾堪〕、趙念昔〔允懷〕、王孚嘉、王楚士、王允文、閔義行共二十四人紅橋修禊、賦詩紀事。(『広陵詩事』卷七)

紅橋詩人聚集の地と為り、王阮亭、宋荔裳皆嘗て此に詠じ、後孔東塘広陵に在りし時、上巳に吳菌次〔綺〕、鄧孝威〔漢儀〕、費此度〔密〕、李艾山〔沂〕、黃仙裳〔雲〕、宗定九〔元修〕、宗子發〔元予〕、查二瞻〔士標〕、蔣前民〔易〕、閔賓連、王武徵〔方岐〕、喬東湖〔寅〕、朱其恭、朱西柯、張諧石〔韻〕、楊爾公、吳彤本、卓近青〔爾堪〕、趙念昔〔允懷〕、王孚嘉、王楚士、王允文、閔義行を招同し、共に二十四人にて紅橋に修禊し、詩を賦し事を紀す。

紅橋を詩人聚集の地とした上で、この地で詩会を開いた者として王士禛、宋琬をまずあげる。ついで孔尚任が揚州詩人 24 名を集めて脩禊をしたことを記す。王士禛、宋琬については、特に紅橋修禊という言葉はついておらず、いかなる詩会であったかの記述もない。孔尚任については、参加した揚州詩人を記録する。このうち、吳綺、鄧漢儀、李沂、仙雲、宗元修<sup>10)</sup>、宗元予、蔣易、王方岐、喬寅、張韻、卓爾堪は『淮海英靈集』に収録される。費密、查士標らは揚州に移り住んだ詩人で、王士禛との詩会にも参加している。これらの参加者の名は、『淮海英靈集』巻一に収録される卓爾堪「上巳孔東塘使君招同吳菌次鄧孝威、費此度李艾山黃仙裳宗定九子發查二瞻蔣前民閔賓連王武徵喬東湖朱其恭朱西柯張諧石楊爾公吳彤本趙念昔王孚嘉楚士允文閔義行紅橋修禊」詩に見え、『揚州画舫録』巻十「虹橋録上」の「梅文鼎」の項目に、「嘗于上巳日与孔東塘、吳菌次、鄧孝威、李艾山、黃仙裳、宗定九子發、查二瞻、蔣前民、閔賓連、王武。徵景州、歙州喬東湖、朱恭、朱西柯、張楷石、楊爾公、吳彤本、趙念昔、王孚嘉、楚士、允文、閔義行紅橋脩禊。此在漁洋之前。東塘為主人。」と記載されている。元々の詩題、『揚州画舫録』は、本名を記さないものがほとんどであるが、『広陵詩事』は、全部ではないが、注として本名を書き加えている。これは、揚州詩人に関する事実を充実させ、後に地方誌などの資料たりうるものとしたという阮元の意識が反映されていると言える。このように、『広陵詩事』が重視するのは、脩禊を主催した著名人ではなく、参加した揚州詩人の面々である。王士禛、孔尚任の詩会について、この他に次のような記述がある。

曲阜孔東塘〔尚任〕官揚州時、屢為文酒之会。嘗与鄧孝威〔漢儀〕、吳菌次〔綺〕、蔣前民〔易〕、宗梅岑〔定九〕、桑楚執〔豸〕梅花嶺登高賦詩。……水絵園脩禊、在康熙乙巳之暮春三日。時王阮亭按部東臯、適陽羨陳其年〔維崧〕婁東毛亦史〔師桂〕亦在、因合邵潛夫〔潛〕、冒巢民〔襄〕、冒穀梁〔禾書〕、冒青若〔丹書〕、許山濤〔嗣隆〕会于此園其為詩三十八首。

(『広陵詩事』卷七)

曲阜の孔東塘〔尚任〕揚州に官たりし時、屢しば文酒の会を為す。嘗て鄧孝威〔漢儀〕、吳菌次〔綺〕、蔣前民〔易〕、宗梅岑〔定九〕、桑楚執〔豸〕と梅花嶺に登高して詩を賦す。水絵園脩禊は、康熙乙巳の暮春三日に在り。時に王阮亭を東臯に按部し、



適たま陽羨の陳其年〔維崧〕、婁東の毛亦史〔師桂〕も亦た在り、因りて邵潜夫〔潜〕、冒巢民〔襄〕、冒穀梁〔禾書〕、冒青若〔丹書〕、許山濤〔嗣隆〕と合わせて此の園に会し其の詩を為ること三十八首。

まず孔尚任の詩会をあげ、参加者を羅列する。鄧孝威、吳菌次、蔣前民、宗元鼎、桑楚執はいずれも『淮海英靈集』に収録される揚州詩人である。水絵園での王士禛による康熙四年（1665）の脩禊でも、詩会に参加した揚州詩人を記録する。あくまでも詩会に参加した揚州詩人を記録するというのが『広陵詩事』の方針であり、紅橋脩禊という催しについてはその詩や開催の状況について記すことはない。参加者としてあげられるのは、全て揚州の人であり、『淮海英靈集』に収録される。

比較のため紅橋脩禊について、『揚州画舫録』の記述を見てみよう。

紅橋脩禊、元崔伯亨花園、今洪氏別墅也。洪氏有二園。紅橋脩禊為大洪園。卷石洞天為小洪園。大洪園有二景。一為紅橋脩禊。一為柳湖春泛。是園為王文簡賦冶春詩處。後盧軫運脩禊亦于此。因以紅橋脩禊名其景。……（『揚州画舫録』卷十「紅橋録上」）

紅橋脩禊、元崔伯亨の花園にして、今洪氏の別墅なり。洪氏に二園有り、紅橋脩禊を大洪園と為し、卷石洞天を小洪園と為す。大洪園に二景有り、一を紅橋脩禊と為し、一を柳湖春泛と為す。是の園王文簡の冶春詩を賦す處と為り、後盧軫運の脩禊も亦た此においてす。因りて紅橋脩禊を以て其の景に名づく。……

『揚州画舫録』では、王士禛や盧見曾がここで脩禊を行ったことで、その景観に紅橋脩禊と名づけたという経緯を述べる。紅橋脩禊がその名を知られたのは、主催の著名人によるものであり、彼らは他郷から訪れた官僚である。主催者と参加詩人を列挙してゆくが、最も紙幅を割くのは、主催者となった著名人王士禛であり、盧見曾に関する記述である。『揚州画舫録』では、盧見曾の紅橋脩禊は盛事として扱われる。

（盧見曾）丁丑脩禊紅橋、作七言律詩四首。……其時和脩禊韻者七千余人、編次得三百余卷。（『揚州画舫録』卷十）

（盧見曾）丁丑 紅橋に脩禊し、七言律詩四首を作る。……其の時脩禊韻に和する者七千余人、編次して三百余卷を得。

盧雅雨初軫運兩淮、有脩禊山堂詩。甲戌軫運与嵇拙修漕運璜、錢集齋侍郎陳群有山堂紀遊和韻詩。集齋手録一卷、泐石平樓。集齋跋云、……邀遊山堂、予亦与焉。明日、嵇君揚帆去、郵寄原韻、則予已還橋李、都軫以和詩及原唱彙致、促予成詩。属手録一卷、予書不足珍重。而都軫風流、真足步漁洋後塵矣。……軫運跋云、山堂紀遊詩、既出海内名公、和者寔衆。迺隨寄到之先後、勒石于平樓、以貽後之覽者。……潤泉跋云、雅雨同錢香樹、嵇黼庭遊山堂、為長譟張壁間。嗣是凡名公卿朝士道經茲土、往往次韻留題而去、

或別後于郵筒却寄、乃鑄諸貞珉、以誌一時文藻之盛。 (『揚州画舫録』卷十六)

盧雅雨 初め兩淮に転運たりて、脩禊山堂詩有り。甲戌 転運と嵇拙修運璜、錢集齋侍郎陳群とに山堂紀遊和韻詩有り。集齋 一卷に手録し、平楼に<sup>るく</sup>泐石す。集齋跋に云ふ、……山堂に邀遊し、予も亦たこれに<sup>あず</sup>与かる。明日、嵇君 帆を揚げて去り、原韻を郵寄するも、則ち予 已に橋李に還りたれば、都転 和詩及び原唱を以て彙致し、予に詩を成さんことを促す。一卷を手録せんことを属さるるも、予の書 珍重するに足らず。而して都転の風流、真に漁洋の後塵を歩むに足る、と。……転運跋に云ふ、山堂紀遊詩、既に海内の名公に出で、和する者<sup>みうや</sup>淺く衆し。迺ち寄せ到るの先後に随ひ、平楼に勒石し、以て後の覽る者に<sup>おく</sup>貽る、と。……潤泉跋に云ふ、雅雨 錢香榭、嵇黼庭とに山堂に遊び、長詩を為りて壁間に張る。嗣いで是れ凡そ名公卿朝士道に茲の土を経れば、往往次韻し題を留めて去り、或ひは別れて後 郵筒に于いて却って寄すれば、乃ち諸を貞珉に鑄し、以て一時文藻の盛を誌す、と。

最初の文では、盧見曾の修禊詩と、それに和韻した者の数が七千余という、歴史的な数に上ることを述べる。取りあげられるのは、盧見曾の詩であり、和韻した詩人の数である。次に挙げた文はこの和韻した人々とは如何なる人々かを述べている。まず和韻した相手として挙げられるのは、嵇璜と、錢陳群であるが、嵇璜は江南無錫の人であり、錢陳群は浙江嘉興の人である。いずれも揚州人ではない。またその後「海内」という、揚州以外の広い地域から郵送で詩が送られ、ために石に彫って後の人に見せたという。跋文を寄せたという秦潤泉で、江寧出身で侍読学士にまで上った名士である。『揚州画舫録』の記録は、全て揚州以外の地での人気に関わるものであり、揚州という狭い地域を超えて全国的な人気を得たことを、紅橋修禊の記録すべきことと捉えているといえる。阮元が『広陵詩事』で揚州詩人にこだわったのと全く異なる視点である。阮元は『揚州画舫録』の完成を見た後に『広陵詩事』をまとめており、同時代の揚州を記すものでありながら、両者は大きく方針が異なっていることが見て取れる。阮元はあくまで「揚州詩人」にこだわる。揚州詩人のみに限定した『淮海英靈集』の後、そこからこぼれ落ちたものを収録したという『広陵詩事』だが、根本にあるのはいずれも「揚州詩人」の顕彰であり、記録であることが、紅橋修禊の記録からわかる。

## 6. 『韓江雅集』の記録

続いて、揚州詩会を代表する唱和集である『韓江雅集』とその吟社の記録について見てみよう。『淮海英靈集』凡例に「馬秋玉徵君等、招集名流觴詠尤盛」とあったが、馬曰瑄ら塩商が主たる主催者となった「觴詠」の代表的なものが韓江雅集である。韓江はまた邗江とも表記され、同人達の詩社は韓江(邗江)吟社と称された。『広陵詩事』に次のようにある。

馬秋玉徵君〔曰瑄〕、半查〔曰璐〕昆弟并嗜古能詩。……又性好交遊四方名士、凡過邗上者、款留觴詠無虛日。結邗江吟社、与昔之圭塘、玉山相埒。錢塘厲太鴻徵君〔鶚〕、陳

授衣〔章〕、帰安姚玉裁秀才〔世鈺〕皆館其家。 (『広陵詩事』巻三)

馬秋玉微君〔日瑄〕、半查〔日璐〕昆弟並びに古を嗜み詩を能くす。……又性交遊を好み四方の名士、凡そ邗上に過ぎる者、款留觴詠して虚日無し。邗江吟社を結び、昔の圭塘、玉山と相埒(ひと)し。銭塘の厲太鴻微君〔鶚〕、陳授衣〔章〕、帰安の姚玉裁秀才〔世鈺〕皆其の家に館す。

馬氏兄弟は、邗上つまり揚州に立ち寄る者を留めて詩宴を連日繰り返す、邗江吟社を結んだという。「圭塘」は元の許有壬(1287-1364)で、隠居地を圭塘別墅と名づけ、詩会を開いた。「玉山」は元の顧瑛(1310-1369)で、玉山道人と号し、築いた玉山草堂で詩会を開いた。馬日瑄は、彼ら歴史に名を残す詩会の主催者になぞらえられている。また家に浙江からの流寓の詩人たち、厲鶚、陳章、姚世鈺を寄寓させたことを記すのは、彼らが当時の詩壇の名士だったことを示す。馬氏兄弟を中心とする詩会の詩をまとめた詩集が『韓江雅集』十二巻である。詩会の場所には、馬日瑄の館のほか、張四科、陸鍾輝が共同で経営した園林「讓圃」があった。『広陵詩事』には、張四科の「讓圃記」を全文掲載している。以下、その一部を挙げる。

郡北郭天寧寺側、隙地百余畝、竹木森蔚。距城不數武、而窅然深邃、若山林間。蓋晉謝文靖公別墅也。以多銀杏、故俗有杏園稱。乾隆庚辛間、馬嶸谷昆季構行菴於其中。傍有某氏廢圃、因從容余以二百千買之、而陸南圻亦助成其事、取陸、張共宅意、顔之曰讓圃。……落成之日、置酒高會、自都御史胡公而下、凡十六人。詩社之集、于斯為盛。自是二十年来、春秋佳日、選勝探幽、多在于此。四方文人士、知有韓江雅集者、未嘗不從遊于行庵讓圃間、賞其地之勝、而慶余輩之獲結隣也。(阮元『広陵詩事』巻六)<sup>11)</sup>

郡の北郭天寧寺の側、隙地百余畝、竹木森蔚たり。城を距つること數武ならずして、窅然深邃たること、山林の間のごとし。蓋し晉謝文靖公の別墅ならん。多く銀杏あるを以て、故に俗に杏園の稱有り。乾隆庚辛の間、馬嶸谷昆季行菴を其の中に構ふ。傍に某氏の廢圃有り、從容するに因りて余二百千を以て之を買ひて、陸南圻も亦た其の事を助成し、陸、張宅を共にするの意を取りて、之に顔して讓圃と曰ふ。……落成の日、置酒高會し、都御史胡公よりして下、凡そ十六人。詩社の集、斯に于て盛と為す。是より二十年来、春秋の佳日、選勝探幽するは、多く此に在り。四方の文人士、韓江雅集有るを知る者、未だ嘗て從ひて行庵讓圃の間に遊ばずんばあらず、其の地の勝を賞して、余輩の結隣するを獲るを慶ぶなり。

馬日瑄の行庵は、韓江雅集の中心となった場であるが、その隣にあった廢圃を張四科が購入し、陸鍾輝と共に経営することとしたという。落成の時に、胡期恒を始めとする詩人が集い、そこから詩社の最盛期を迎え、20年間詩会の賑わいがこの場で続いたという。その詩会は「韓江雅集」とされ、四方の名士が揚州を訪れては行庵、讓圃路内を訪れて詩会に参加したのである。揚州詩会は、揚州以外の各地から訪れる名士たちに広くその名を知

られ、皆が揚州の地を訪ねる大きな要因となっていたことがわかる。その詩会の詩はそのつど出版されたようだ。『韓江雅集』巻一「金陵移梅歌」全祖望序にも、韓江雅集の唱和集出版のようすを以下のように記す。

広陵近有唱和之集、胡都御史復翁与其里之詩人相与過從之作、而寓公如厲徵君樊榭輩皆予焉。已選定数巻行于世。……予拈移梅為題、在席各賦七言古詩一章、裒成一巻、同人即今開雕。  
（『韓江雅集』巻一）

広陵近ごろ唱和の集有り、胡都御史復翁と其里の詩人と相与に過從するの作にして、寓公は厲徵君樊榭輩の如き皆これに予かる。已に数巻を選定して世に行はる。……予移梅を拈して題と為し、席に在りて各おの七言古詩一章を賦し、裒めて一巻と成し、同人即今開雕す。

已に数巻を刊行したというのは、毎回ではないにせよ、複数回開かれた詩会のたびに詩集が刊行されたことをうかがわせる。そしてこの時も「移梅」を題材としてそれぞれが造った詩は、すぐに刊行することとなったと述べている。現存の『韓江雅集』十二巻は何度も出版された雑誌のようなものであった詩会の詩集から何回分かをを選び、1つの詩集にまとめたものと考えられる。『韓江雅集』は収録される詩の数は聯句を含め90首、詩人は41名、収録期間は乾隆八年～十二年の6年間に渡っており、清代揚州の詩会を記録した最大規模の詩集といえる。

『韓江雅集』についての『広陵詩事』における記載の方法は、まず主催者たる馬曰瑄、馬曰璐が詩会の詩を刊行したことを記し、その後に参加詩人を挙げる。

馬曰瑄〔秋玉〕、曰璐〔半査〕兄弟並好客、主持風雅、勸其朋侶游宴之詩為韓江雅集十二巻。与斯集者、則有胡期恒〔号復翁、本湖南人、官左都御使。生於揚州、故在揚亦自号里人。然曾為江西布政使、是以不録入淮海集〕、唐建中〔字南軒、天門人、康熙癸巳庶常〕、程夢星、汪玉樞、厲鶚〔錢塘人、孝廉〕、方士庶、王藻、方士廔、陳章〔錢塘人〕、閔華、陸鍾輝、全祖望〔鄞县人、庶常〕、張四科、史肇鵬、楊述曾〔陽湖人、編修〕、洪振珂、鄭江、張世進、趙昱〔仁和人〕、丁敬〔錢塘人〕、杭世駿〔錢塘人、編修〕、趙信〔仁和人〕、趙一清、戴文灯〔埭安人、丁丑進士、礼部員外郎〕、陳祖范〔錢塘人〕、查祥、邵泰、姚世鈺〔埭安人〕、王文充〔江都人、編修〕、劉師恕、程士楨、樓綺〔字于湘、長洲人〕、団昇、陸錫疇諸名宿。  
（『広陵詩事』巻七）

馬曰瑄〔秋玉〕、曰璐〔半査〕兄弟並びに客を好み、風雅を主持し、其の朋侶游宴の詩を勸して韓江雅集十二巻と為す。斯の集に与かる者には、則ち胡期恒〔復翁と号す、本と湖南の人、左都御使に官たり。揚州に生まれ、故に揚に在りても亦た自ら里人と号す。然れども曾て江西布政使と為る、是を以て淮海集に録入せず〕、唐建中〔字は南軒、天門の人、康熙癸巳の庶常〕、程夢星、汪玉樞、厲鶚〔錢塘の人、孝廉〕、方士庶、王藻、方士廔、陳章〔錢塘の人〕、閔華、陸鍾輝、全祖望〔鄞県の人、庶常〕、張四科、

史肇鵬、楊述曾〔陽湖の人、編修〕、洪振珂、鄭江、張世進、趙昱〔仁和の人〕、丁敬〔錢塘の人〕、杭世駿〔錢塘の人、編修〕、趙信〔仁和の人〕、趙一清、戴文灯〔帰安の人、丁丑の進士、礼部員外郎〕、陳祖范〔錢塘の人〕、查祥、邵泰、姚世鈺〔帰安の人〕、王文充〔江都の人、編修〕、劉師恕、程士槭、樓錡〔字は于湘、長洲の人〕、団昇、陸錫疇諸名宿有り。

『韓江詩集』には41名の名が見えるが、『広陵詩事』にはそのうち、36名を収録する。誰を収録しているかについては、後ろにつけた表に詳細を記した。『韓江雅集』を記録する李斗『揚州画舫録』の30名に比べ、かなり多くの詩人を収録しており、揚州詩会の隆盛をより伝えるものとなっている。『淮海英靈集』という揚州詩総集では扱われなかった流寓の詩人たちは、ここに記録される。

更に、元々の『韓江雅集』では、詩題ごとに詩人とその詩を収録するが、詩人については、名以外の情報は載せない。『広陵詩事』では出身地、身分などの情報を加えている。これは地方志等や史書の資料となりうる要素である。ゆえに正確を期し、阮元なりの基準を当てはめている。たとえば胡期恒の項では、彼を揚州人として扱わない理由を、湖南省の人で揚州生まれだから自分では揚州人と名乗っているが、江西布政使であったこともあり、揚州人とは認めず、揚州人を対象とする『淮海英靈集』に収録しなかったと述べている。『揚州画舫録』では、胡期恒は揚州で生まれ育ったとしており、揚州人として扱うのだが、阮元はそれに異議を唱え、他郷の人として扱っているのである。<sup>12)</sup>

続いて、『韓江雅集』の詩題を延々と挙げ、注をつける。〔 〕内は阮元の注である。ここでは一部を取りあげる。

其詩則有「金陵移梅歌」〔半查自金陵移古梅十三本、植於七峰草亭之陽。元按、高郵王樓村先生嘗夢老人付以十三本梅花、因屬禹鴻臚作十三本梅花書屋図、繆澧南司寇諸君皆題之。故王藻詩云「却笑白田王内翰、夢里栽梅画裏看。」〕、「冬日集經畚堂分詠」〔糖蟹、煨芋、剪橘、掃葉、淹菹、護蘭、糊窓、烘梅、暴背、開鑪〕、「雪中故事」〔洪州西山瓜牛廬、香山精舍、蘆洲兔園、竜門孤山、聚星堂、懸瓠城、少林剡溪〕……「分詠揚州古蹟」〔雲山閣、淳于禁宅、康山水事、秋声館、木蘭院、玉勾井、阿師橋、迎仙樓、居竹軒、棲靈塔、偕樂園〕。

其の詩は則ち「金陵移梅歌」〔半查金陵より古梅十三本を移し、七峰草亭のに植う。郵王樓村先生嘗て老人付するに十三本梅花を以てするを夢み、因りて禹鴻臚に属して十三本梅花書屋図を作らしめ澧南司寇諸君を繆<sup>まじ</sup>へ皆之に題す。故に王藻の詩に云ふ、「却て笑ふ白田 王内の翰、夢里に梅を栽え画裏に看る。」と〕、「冬日集經畚堂分詠」〔糖蟹、煨芋、剪橘、掃葉、淹菹、護蘭、糊窓、烘梅、暴背、開鑪〕、「雪中故事」〔洪州西山瓜牛廬、香山精舍、蘆洲兔園、竜門孤山、聚星堂、懸瓠城、少林剡溪〕……「揚州古蹟を分詠す」〔雲山閣、淳于禁宅、康山水事、秋声館、木蘭院、玉勾井、阿師橋、迎仙樓、居竹軒、棲靈塔、偕樂園〕有り。

まず『韓江雅集』巻一の最初に収録されるのが「金陵移梅歌」である。『韓江雅集』では、この詩には全祖望の序があるのだが、阮元は序から「半查方自白下移古梅一十三本、植于七峰草亭之陽」の部分のみを採る。全祖望序にはそれ以外に、先に挙げた韓江雅集の出版が行われたこと、全祖望の個人的な関わりなどが書いてあるのだが、そこは削除する。かわりに加えられたのは、禹鴻臚に作らせた「十三本梅花書屋図」のことである。禹鴻臚は、禹之鼎（1647-1709）で、揚州の人で康熙年間の宮廷画家である。ここは揚州の画家が関連する詩を作っていることの方を記載すべき内容と考えて、自ら注を加えたのだろう。

次の「冬日集経畚堂分詠」は、<sup>13)</sup> 阮元注では、分詠した時に各人に割り振られた詩題を記すのだが、『韓江雅集巻』では、それぞれ「程夢星得糖蟹」、「馬曰琯得煨芋」、「厲鶻得剪橘」、「王藻得掃葉」、「馬曰璐得淹菹」、「陳章得護蘭」、「閔華得糊窓」、「全祖望得烘梅」、「張四科得曝背」、「史肇鵬得開爐」と詩人名をつけている。阮元は誰が詠じたかを記すことはなく、何が詩会の詩題とされたかのみを記録する。

続く「雪中故事」は、『韓江雅集』巻一での詩題は、「長至前三日同人集蟬書楼下時風日晴美雪意未作因分賦雪中故事各成五言四韻以為宿麦之先兆云」であるが、「雪中故事」のみを抜き出して詩題とする。何を詠じているかの要点をのみ伝えており、『韓江雅集』をそのまま正確に記録しようとするのではないことがわかる。注には、先の「冬日集経畚堂分詠」と同じく、各人が得た詩題を記す。『広陵詩事』では分詠しているものについては、各自の詩題のみを記す。「分詠揚州古蹟」は、詩題に古蹟を挙げているが、当時の地方志は、古蹟の項に関連する詩を載せるのが通例であった。この詩題は、詩会が地方志と繋がっていたことを示唆するものである。そこに阮元が詩題を記録する意味があったのだろう。

また、『広陵詩事』は詩会の中の聯句を多く記録し、『韓江雅集』のものも多く含む。聯句については、「聯句之盛、莫過於馬氏小玲瓏山館、程氏今有堂、張氏著老書堂（聯句の盛、莫過於馬氏小玲瓏山館、程氏今有堂、張氏著老書堂に過ぐる莫し）」とした上で、詩題と作者を羅列する。詩人は、たまたま揚州を訪れた人ではなく、揚州に居住した人々である。聯句を通じて、揚州に関わる多くの詩人の名が、『広陵詩事』に記録されることとなった。『揚州画舫録』は詩会の聯句の記録がほとんどなく、『揚州画舫録』にない詩会の情報を、『広陵詩事』は多く提供しているのである。

参考までに、『韓江雅集』についての、『広陵詩事』『揚州画舫録』『淮海英靈集』での詩人の収録状況を表にする。

※「回数」は『韓江雅集』に登場する回数であり、人名は、『韓江雅集』への登場回数の多い順に並べる。また、貫籍、居住地など関連の地域を記す。

※『広陵詩事』は◎と表記。『揚州画舫録』は○と表記。『淮海英靈集』は□と表記。

人名		収録書籍	貫籍・居住地など 『淮海英靈集』所収巻
陳章	92	◎○	浙江錢塘。揚州馬氏宅に寄寓。
馬曰璐	90	◎○□	本籍祁門。揚州塩商。『淮海』乙集巻三

## 『広陵詩事』における詩会の記録

馬日瑄	82	◎○□	本籍祁門。揚州塩商。『淮海』乙集卷三。
閔華	81	◎○□	江蘇江都。『淮海』監生。
程夢星	67	◎○□	江蘇江都。『淮海』甲集卷四。「篠園」で詩会を主催。
陸鍾輝	65	◎○□	江蘇江都。『淮海』乙集卷三。張四科と「讓圃」で詩会を主催。
張四科	65	◎○	陝西臨潼。揚州塩商。「讓圃」で陸鍾輝と詩会を主催。
方士庶	60	◎○□	江蘇江都。揚州塩商。『淮海』甲集卷四。方士庶の弟。
厲鶚	55	◎○	浙江錢塘。孝廉。馬氏宅に30年寄寓。
胡期恒	46	◎○	湖広武陵。揚州に生まれ、罷官後、揚州に帰還。
王藻	37	◎○	江蘇呉江。
唐建中	28	◎○	湖北天門。進士。翰林院散館後、揚州に僑居。
汪玉枢	28	◎○	安徽歙県。揚州塩商。「九峰園」で詩会を主催。
方士庶	28	◎○□	安徽歙県。揚州塩商。『淮海』甲集卷四。
張世進	21	◎○	陝西臨潼。揚州居住。張四科の叔父。
全祖望	20	◎○	浙江鄞県。進士。揚州、杭州を往来。
姚世鈺	20	◎○	浙江帰安。揚州に居住。
洪振珂	17	◎○	安徽歙県。貢生。
杭世駿	10	◎○	浙江仁和。翰林院編修。免職後、杭州で南屏詩社結成。
樓綺	7	◎	江蘇長洲。*1*韓江吟社「後五君」の一人。
劉師恕	4	◎○□	江蘇宝応。『淮海』乙集卷一康熙の進士。告帰の後揚州に居住。
王文充	3	◎○	江蘇江都。『淮海』甲集卷四。雍正の進士。
程士楫	3	◎	江蘇泰州。揚州、杭州に居る。*2
陸錫疇	3	◎○	江蘇長洲。馬氏宅に寄寓。
高翔	2	○□	江蘇甘泉。揚州八怪の一人。
史肇鵬	1	◎	出身地不明。
楊述曾	1	◎	江蘇陽湖。乾隆の進士。
黄裕	1	□	江蘇儀徴。『淮海』乙集卷四。
鄭江	1	◎○	浙江錢塘。進士。
趙昱	1	◎○	浙江仁和。杭州塩商。
丁敬	1	◎○	浙江錢塘。布衣。博学鴻詞に推挙される。
趙信	1	◎	浙江仁和。杭州塩商。博学鴻試に推挙される。
趙一清	1	◎	浙江仁和。趙昱の息子。
戴文灯	1	◎	浙江帰安。礼部員外郎。
陳祖范	1	◎○	江蘇常熟。揚州安定書院講席。*3
查祥	1	◎○	浙江海寧。翰林院編修。
張增	1		浙江仁和。杭州にて杭世駿らと文社を結ぶ。

団昇	1	◎○□	江蘇儀徵。後江蘇泰州に居住。黄裕らと詩会を開催。
方世挙	1	○	安徽桐城。程夢星の従兄。
鮑鈺	1		山西応州。浙江長興知県となり、厲鶚らと交遊。
釈明中	1	□	浙江石門。『淮海』癸集巻一。揚州に居住後、杭州に移る。
邵泰	1	◎	順天大興。康熙の進士。揚州安定書院主講。

\*1『揚州画舫録』巻四に「樓綺。字于湘。浙江名諸生。」と浙江人とするが、阮元『広陵詩事』巻七には「樓綺。字于湘、長洲人。」とある。杭世駿『道古堂文集』巻四十三「朝議大夫候補主事加二級馬君墓誌銘」に「錢塘范鎮、長洲樓綺年長未婚。」とあり、錢塘とあるのは、范鎮のことであり、樓綺は長洲人と取るべきだろう。

\*2焦循『揚州足徵録』巻十七所収の程士楨「石桴詩鈔序」に、「泰州戴君岳子」について「君本余休寧之隆阜人、僑居泰州東洵。」とした上で、「同邑学弟程士楨」としている。よって、貫籍は徽州休寧ではないだろうか。

\*3阮元『広陵詩事』巻七に「陳祖范、錢塘人。」とあるが、『清史稿』巻四百八十列伝二百六十七儒林一に「陳祖范、字亦韓、常熟人」とあり、陳祖范の『司業詩集』にも、「海虞陳祖范著」と記されている。「海虞」は常熟の地である。

## 7. その他の詩会の記録

『広陵詩事』巻七には、多くの詩会の様子が記されている。中には他の地域詩話や地方志には見られない貴重な揚州詩壇の記録がある。

儀徵汪礪巖(堂)、就東城画旧址構水香村墅、名流多詠集其中。乾隆甲戌秋杪、曾与鄭板橋、繆客船、黄北垞、蕭鄧林、張煦齋、陶韻亭、金麟洲、繆禹門、沈玉崖、方竹樓、方介亭、徐荔村、葉根上人共十四人、集百尺樓、以趙嘏殘星幾点雁橫塞、長笛一声人倚樓句分韻賦詩。(『広陵詩事』巻七)

儀徵の汪礪巖(堂)、東城画旧址に就きて水香村墅を構へ、名流多く其の中に詠集す。乾隆甲戌秋杪、曾て鄭板橋、繆客船、黄北垞、蕭鄧林、張煦齋、陶韻亭、金麟洲、繆禹門、沈玉崖、方竹樓、方介亭、徐荔村、葉根上人と共に十四人、百尺樓に集ひ、趙嘏の殘星幾点雁塞に横たわり、長笛一声人樓に倚るの句を以て分韻して詩を賦す。

これは揚州の儀徵の詩人汪堂の許に詩人達が集った詩会の記録である。この記述は『淮海英靈集』丙集巻四の「甲戌秋杪小尽日招同鄭板橋、繆客船、黄北垞、蕭鄧林、張煦齋、陶韻亭、金麟洲、廖禹門、沈玉崖、方竹樓、方介亭徐荔村、葉根上人集百尺樓以趙嘏、殘星幾点雁橫塞長笛一声人倚樓句、分韻得人字」という汪堂の詩題による。詩集にあれば単なる個人の詩の詩題だが、『広陵詩事』に他の詩会の記録と並べることで、揚州の詩会活動の一部として位置づけることができ、揚州詩会全体を見通す資料ともなる。その他、「馬半查、方西疇同日生、皆在牡丹開時、每有詩讌。」(『広陵詩事』巻七)といったごく個人的な



小さな詩会の記録もあり、他の揚州文献にない情報を提供する。

更に、『揚州画舫録』は詩会の地についての記載が多いが、『広陵詩事』は『揚州画舫録』にない詩会の地を記録する。たとえば「邵伯」である。

邵伯詩人并集之地有蒋氏枝廬、史氏融屋〔枝廬屢見周第六集中、蓋始為周業、而後歸于蒋者〕。  
(『広陵詩事』卷六)

邵伯詩人并集の地に有蒋氏枝廬、史氏融屋〔枝廬屢しば周第六集中に見ゆ、蓋し始め周の業為りて、後に蒋に帰す者ならん〕

邵伯埭旧多詩人、競為文酒之会。会有潘持垣、劉雲章、徐夢猷、邱子高、張伊蒿、鄭開平、張汝州、謝雲足、王淑人、王鶴崖、謝逸墅、賈雪三、王天陟。周地六地六詩集中、有清明前二日、同人過王天陟別墅探梅詩、……。(『広陵詩事』卷七)

邵伯埭旧と詩人多く、競ひて文酒の会を為す。会に潘持垣、劉雲章、徐夢猷、邱子高、張伊蒿、鄭開平、張汝州、謝雲足、王淑人、王鶴崖、謝逸墅、賈雪三、王天陟有り。周地六地六詩集中に、清明前二日、同人過王天陟別墅探梅詩、……有り。

この他にも邵伯に関する記載は幾つかある。『揚州画舫録』には、邵伯は詩会の地としては取りあげられていない。他に記載のない詩会に関する事項については、『広陵詩事』はとくに詳細に記載しようとする傾向がある。阮元は、『広陵詩事』は『淮海英靈集』に記載できないことを収録する、としていたが、それだけではなく、他の揚州文献、例えば『揚州画舫録』にない記事を意識的に載せ、それらと合わせて揚州志乗の欠を補おうとしているのである。

## 8. おわりに

阮元は清代揚州詩壇を記録するにあたり、『淮海英靈集』と『広陵詩事』の二つの書籍を編纂した。『淮海英靈集』は、揚州以外の詩人を排除することで、揚州詩人に限定した詩集となった。当時地域詩集の多くは、「流寓」「寓賢」という項目を設け、他郷の著名人の名を借りることで当地の名を高めようとした。しかし知名度の高い他郷の詩人を大きく取りあげれば取りあげるほど、全国では名を知られない当地の詩人達の存在を影の薄いものにさせることになる。それは地域詩集の取るべき姿勢ではない、というのが阮元の考えであった。よって『淮海英靈集』は揚州詩人にこだわって編纂された。しかし、揚州詩壇の特異性は、交通の要衝であり、富裕な塩商や官僚の下に開催される詩会が全国の詩人を集めたことにある。そこで阮元は、新たに『広陵詩事』を撰し、揚州以外から当地に赴任し、あるいは寄寓した多くの詩人達を記し、彼らの活躍した詩会を記すことで、『淮海英靈集』に描ききれなかった揚州詩壇の広がりを示すこととした。二つの書物によって清代前半の揚州詩壇の全貌は、かなり詳細にわかるようになった。しかし『広陵詩事』をよく読めば、他郷の詩人を記すとはいえ、あくまでも記載の中心は揚州出身の詩人達となるよう工夫さ

れていることがわかる。『広陵詩事』の揚州への強いこだわりは、地域の記録全盛の時代に、地方文献がとるべき方向を阮元が示した作品だったと言えるのではないだろうか。

## 注

- 1) 本稿では古今詩話叢編所収『広陵詩事』を底本とした。呉宏一『清代詩話知見録』（中央研究院中国文哲研究所 2002）は、『広陵詩事』の版本及び館蔵について最も詳細に記されている。呉によれば、古今詩話叢書本は、文選楼叢書によるものである。『広陵詩話』の排印本には『広陵詩事』（広陵書社 2005 簡体字）がある。
- 2) 蒋寅「清代文学与地域文化」『清代文学論稿』（鳳凰出版社 2009）では、「文学史發展到明清時代、一個最大特徴就是地域性特別顯豁起来、对地域文学傳統的意識也清晰的凸顯出来。……以地域文学為对象的文学選本、也許是明清總集類数量最豐富、最引人注目的種群。而其中最主要的部分又是詩歌、数量龐大的郡邑詩選和詩話、顯示出強烈的以地域為視覺和單位來搜集、遴選、編集、批評詩歌的自覺意識。」とその実態を指摘する。
- 3) 蒋寅『清代文学論稿』（鳳凰出版社 2009）「清代文学与地域文化」。に「以地域文学对象的文学選本、也許是明清總集類数量最豐富、最引人注目的種群。而其中最主要的部分又是詩歌、数量龐大的郡邑詩選和詩話、顯示出強烈的以地域為視覺和單位來搜集、遴選、編集、批評詩歌的自覺意識。這種意識是詩歌創作觀念中区域性視野和創作實踐中地域性特徵的自然反映、也是我們研究清代文学首先必須注意的重要問題。」とある。なお、この論考は、蒋寅『中国古代文学通論（清代卷）』（遼寧人民出版社 2005）に「清代文学与地域文学」として収録される。）
- 4) 夏勇『清詩總集通論』（中国社会科学出版社 2016）
- 5) 蒋寅前掲書に「在修志中、地方文献的搜集和芸文志的編纂是最重要的工作、伴随修志而来的地方文献整理直接為地方文学文献的編纂奠定了基礎。事实上大多数地域詩話的編撰或多或少都与修志有關。」とある。
- 6) 倪晋波・余志敏「桑梓風雅、地方詩史与国家政教-論清代江蘇郡邑詩話的價值變奏-」（『江蘇大学学报（社会科学版）』第20卷第1期 2018）では、江蘇地方の「郡邑詩話」として、阮元『広陵詩事』、単学傳『海虞詩話』、李福祚『昭陽述旧編』、顧季慈『蓉江詩話』、徐伝詩『星湄詩話』、沙仁寿『東洲詩話』等を挙げる。
- 7) 阮元の年譜としては、古くは張鑑等による『雷塘庵主弟子記』（1881）があり、これは『阮元年譜』（中華書局 2006）として刊行されている。王章涛『阮元年譜』（黄山書社 2003）は、張鑑らの「弟子記」を踏まえた上で、多種の資料を引用し、事蹟及び著作を詳細に記したもので、本稿ではこの年譜を主に参照している。その他、阮元の伝記には、郭明道『阮元評伝』（社会科学文献出版社 2005）、陳居淵『焦循阮元評伝』（南京大学出版社 2006）等がある。
- 8) 蒋寅『清代文学論稿』（鳳凰出版社 2009）「清代文学与地域文化」p73に「值得注意的是、無論詩集還是詩話、常都把流寓本地或歌詠本地風物的外地詩人的作品收羅進來。」「外地作者所写的歌詠本地風物的作品、他們的歌詠會成為当地人引為驕傲的資本、広

為伝誦、婦孺皆知。王漁洋一句「緑楊城郭是揚州」、所激発的審美認同、応不在任何揚州詩人的作品之下、而它对揚州文学伝統参与更是不言而喻的。地域詩集和詩話收入外地人の題詠、道理就在這里。当然更多地承担這部分任務的是地方誌、各級地方誌中的「芸文志」都収有題詠、記述本地風物名勝的詩文、這可以視為郡邑詩文集和詩話的一個補充。」という。

- 9) 蘇保華『揚州文学鏡像研究』(社会科学文献出版社 2009)に「由于紅橋周圍風景秀麗迷人、從而吸引了揚州衆多的文人來這里結社吟詩、酬唱應和。清代的紅橋修禊著名的共有三次。康熙元年(1662)春三月初三、時任揚州推官的王士禛与諸多揚州名士修禊紅橋。王士禛之後、『桃花扇』作者、孔子第六十四代孫孔尚任治水廣陵期間、也曾与二十四位名士在紅橋暢飲填詞。兩任揚州塩運使的盧雅雨、也曾紅橋修禊。」と、この三次の修禊を清代の紅橋脩禊の最も著名な例とし、揚州で多くの文人が詩社を結び酬唱を楽しんだ象徴としている。
- 10) 原文は「元修」となっているが、「元鼎」の間違いと考えられる。宗元鼎は、王士禛との交流で知られる。宗元鼎は、『淮海英靈集』甲集卷三に収録される。
- 11) 張四科『宝閑堂集』卷二に収録される。ただし、張四科は『淮海英靈集』には採録されていない。
- 12) 『揚州画舫録』卷四に「胡期恒、字復齋。湖廣武陵人。……復齋生長揚州。」とある。
- 13) 『韓江雅集』卷一では「經畬堂」ではなく「畬經堂」としている。全謝山年譜では「(乾隆)六年……經揚州止宿馬氏畬經堂成困学紀聞三箋」と「畬經堂」とするが、阮元が敢えて変更したのかは不明である。

※本論は平成二十九年～三十一年度科学研究費補助研究 基盤研究(C)17K02653「清朝康乾年間における杭州詩人集団の詩会活動と地方文献編纂に関する研究」の研究成果の一部である。

## Record of Poetry Gatherings in *Guangling Shishi*

Nobuko ICHINOSE

*Department of Business Administration, Faculty of Business Administration,  
Fukuyama Heisei University*

Abstract: *Guangling shishi* is a record of Yangzhou poetry from the early- to mid-Qing Dynasty, written by Qing scholar Ruan Yuan. Ruan Yuan completed *Huaihai yinglingji*, a collection of poems by Yangzhou poets from the early- to mid-Qing Dynasty, the year before the publication of *Guangling shishi*. *Guangling shishi* is a record of various matters related to poems that could not be included in *Huaihai yinglingji*, targeting Yangzhou of the same period. The description of poetry gatherings is of particular interest. Yangzhou was known for its poetry gatherings during the first half of the Qing Dynasty. The main characteristic of Yangzhou poetry gatherings was that the area was a key point of transportation; poetry gatherings flourished thanks to many poets who visited the area from other regions, because the Yangzhou salt merchants invited artists from outside of the region. *Huaihai yinglingji* is a collection of poems about individuals from Yangzhou and residents of Yangzhou; it was unable to reflect the culture of the Yangzhou poetry scene, which was supported by collective poetry composition and varied people. In this sense, *Guangling shishi* can be said to be a valuable record that conveys the reality of the Yangzhou poetry scene in the Qing Dynasty.

In this paper, we will clarify the features of *Guangling shishi*, examine how poetry meetings were recorded in the local magazines and the like that flourished in the Qing Dynasty, and discuss the relationship between poetry meetings and local records..

Key Words: *Guangling shishi* , *Huaihai yinglingji* , poetry meeting